
螺旋の絆

高橋あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

螺旋の絆

【Nコード】

N9308X

【作者名】

高橋あきら

【あらすじ】

平凡な女子高生の秋穂は、ある日突然幼馴染の志信と妖に襲われてしまう。そこを助けてくれたのは、あの有名な今村翔華と不思議な力を持つ謎の転校生だった。今までの平凡生活は一転してしまう。妖とは？今村家とは一体？ 学園和風ファンタジー。

登場人物

話の進行につれて増えていきます。

@香住 秋穂 / Akihiko Kasumi

宮野森高校二年。

主人公。

平凡を絵に描いた少女。

運動神経は皆無に近く、根っからの文系。

学業は芳しくないが、頭の回転は良い。

母親を幼少の頃に亡くし、父方の祖父母と父の四人で暮らしている。

@清田 志信 / Shinobu Kiyota

宮野森高校二年。生徒会二年副会長。

秋穂の幼馴染。

基本冷静で落ち着いてる。

勉強もできてスポーツ万能、所謂美形のためもてる。

毒舌。

@今村 翔華 / Shohka Imamura

宮野森高校二年。クラス委員長。

茶髪の巻き髪、がつつりメイクという見た目に反して、成績優秀運動神経抜群。

生まれ持つてのカリスマ性で、人に指示を出すのが得意。

色んな噂が絶えないが、天性のカリスマ性のため表立ってみんなは何も言わない。

今村家現当主。

@今村 之人 / Y u k i h i t o I m a m u r a

秋穂のクラスにやってきた転校生。

綺麗系だが、笑うと可愛いらしい。

性格は悪くない。

成績は上の下。運動神経もいいため、体育の成績も上々。

人の感情には敏感。

狩人の一人。

@篠田 夏南 / K a n a n S h i n o d a

宮野森高校一年。生徒会書記。

元氣少女。

小柄で可愛らしい。

治癒を得意とする篠田家で高い能力を誇る。

@篠田 ユキ / Y u k i S h i n o d a

二十代後半。

今村の本家のお手伝いさん。

和服が似合う美人。

夏南の異母兄弟（姉）。

@燈織 / H i o r i

“暗”^{くら}と呼ばれる一族。

情報収集や記憶操作、暗殺といった表にはでない仕事をこなしている。

燈織とは今村当主直属の者に与えられる名前。

1章 始まる 1

応え。

応えよ。

時は近い。

こちらは目覚めた。

「おい、秋穂。」

横を見れば、心配そうな顔をした幼馴染がこちらを見ていた。

「ぼーっとしてたぞ、大丈夫か？」

「うん。ごめん、志信。」

志信曰く、どうも私は最近こうしてばーっとしていることがある、らしい。立ったまま寝るなんて器用だな、なんて前に言われてつい怒ったけど、あながち間違いじゃないのかもしれない。

夢を見ている。ただ正気に戻ると全て忘れてしまっているけど。思い出したいけど、思い出せない。

思い出せない夢は、まあ、さておき、どんな状態でも夢を見るほど寝ているのだ。正直自分でも呆れ半分、驚き半分だ。

紅葉が美しい並木道を歩き、学校が見えてきたところで何となく自分の体に異変を感じた。

肌がざわざわと粟立ち、心臓がまるで運動した後みたいにとくどくと早鐘を打つ。あきらかにおかしい、変だ。

「し、志信、何かわかんないけど、変な感じがする。」

「秋穂？」

私の顔を覗き込むために前に志信が立った。そして見てしまった。その後ろに現れた、血のように赤い瞳と獣のような大きく鋭い爪を備えた手を振りかざした“人のようなもの”を。

「志信っ」

叫んだ時には時すでに遅く、志信は背中を切り裂かれ、私の方に倒れ込んでいた。抱きしめた志信の背中からは止めどなく生暖かい紅の液体が滲み、制服を浸食し、支えている私の手も染め上げた。

ふと頭上に陰が差したように思い見上げると、焦点の定まらない瞳が私を捉え、志信の血が付いた手を大きく振りかぶる。

強く目を閉じて、来るべき時を待った。が、何もない。痛みもない、

それどころか生きている。おそろおそろ瞳を開けると、そこには私達を背に立ち、刀の背で押さえ込んでいる女の子がいた。

（あれ？この人……。）

「之人！」

大きな声で男の人、と思わしき名前を叫ぶ。その瞬間、いつの間に現れたのかうちの高校の制服を着た男の子は音もなく“例の者”の背後に立ち、流れるような動作で何か鋭利なものを切っ先が貫通するまで心臓に突き刺した。

耳が裂けるかと思うほどの断末魔の叫びをあげ、驚くことにそれは光の粒子となり霧散した。

一連の流れをただただ見ていたところで、はっとする。私の腕には傷付いた志信がいる。呼吸が浅く、血が止まらない。このままでは出血多量で死んでしまう。

「志信、やだ、しっかりして。死なないで。」

頬を涙が伝う。だからなのかなんなのか、体中が熱い。まるで血が沸騰しているみたいに。何だか耳が遠く聞こえる。

アハハハハハハハハハハ！

なぜかはわからないけど、頭に女の人の甲高い笑い声が響いた。本当に愉快だ、おかしい、そう言いたげな笑い声。

頭が痛い、やめて、その笑い声を止めて。じゃないと

「香住さん、香住さん」

強い声で私の苗字を呼ぶ人がいる。ゆっくりとそちらに焦点を合わせると、頭の笑い声は消え、体中の血が沸騰するような感覚が収まった。

さっきの笑い声がすつごく嫌でしかたがなかった。止めないと……どうするつもりだったんだろ。まあ、いいか。それよりも志信だ。

「いつ今村さん、志信が！」

「大丈夫。」

そう言う私を呼び起こしてくれた人、もといクラスメイトの今村さんは手を志信の患部に当てる。すると手から光が現れたかと思うと、傷口に吸われるようにして消えていった。志信の顔色は良くなり、出血を止まり、呼吸も通常と何ら変わりなくなった。

今は静かな息で寝ている。

「もう大丈夫。三十分くらい保健室で休ませてれば、後はけろりとした顔で授業を受けれる。」

「わかった。助けてくれて、ありがとう。」

今村さんたちがいなかったら、確実に私達は助からなかった。本当に感謝している。だからお礼を言った。

すると今村さんは目を大きく見開いていた。私は無意識のうちに、何か驚くようなことをしたのだろうか。

「君は、俺達の力に疑問を持たなかったのかい？」

今村さんの後ろに控えていた之人と呼ばれた男の人 私を直接的に助けてくれた人がそう聞いてきた。

今まで一言も話さなかった分、何だか重たく聞こえる。

「俺達、て」

おもむろに手を出し、一振りする。するとその手は光り輝き、鋭利な刃物になっていた。

そう、鋭利な。何ものも切り裂けるほどに研ぎ澄まされた。

（ああ、これで刺したんだ。）

男の人は何も言わないけど、このタイミングで出すということは、そう言うことなのだろう。

今村さんの一瞬にして志信を治した力と、この人の瞬時に手を刃物に変える力。それらは人ならざる者の力で、常軌を逸している。でも不思議と私はそれに怯えたりはしなかった。

「正直ちよつと驚きましたけど、大丈夫です。」

「そうか。」

私の言葉に安心した之人さんはにこりと笑った。

志信と同じで、綺麗な顔の部類に入る人だと思うけど、笑った顔は可愛い。これがいわゆるギャップっていうものなんだろう。さぞや女の子にもてるんだろうなあ。

「さーて、そろそろ移動しないと。もうじき登校する生徒たちがやってくるだろうし。之人、清田を保健室に連れてって。場所は西昇降口から入って左にあるから。」

「わかった。」

私から志信を預かると、瞬きした時には消えていた。瞬間移動？ま

あ、これも彼らの力のうちの一つなんだろう。

何にしても、私一人で志信を抱えて歩いていくのはちょっと骨が折れただろうから、助かることこの上ない。うん、感謝感謝。

それにしても、あの今村さんと話しているなんて変なかんじ。

うちのクラスの中で一番明るくて、本当に今風の人で、私とは正反對のタイプの人。多分、さっきの事件が無ければ、きっと係わり合いになることはなかったんだろうな。

「立てる？」

手を貸そうか、とも言われたけど私は何一つ怪我をしてなかったから、丁重にお断りして自力で立ち上がった。

安否の確認も兼ねた問いかけだったみたいで、大丈夫だとわかると、今村さんに促され学校への道を歩くことになった。

「あの、今村さん。」

「なーに。」

「もしかして、ユキヒトさんって、転校生？」

「そうだよ。今日付けで、宮野森高校の生徒になる。」

やっぱり。さっき志信を運ぶ為に保健室の場所を教えてたから、そうじゃないかなあとは思ってたんだけど、どうやら当たりらしい。でも転校生なのに、もう知り合いなんだ。友達なのかな。あ、彼氏とか？

「変な誤解される前に言っとくけど、之人は親戚だから。」

釘を刺すように言われてしまった。ごめん、その変な誤解後です。転校生、か。何年何組に入るんだろう。んー、まあ、いつか。その

うち聞いてみよう。

「にしても、香住さん朝早いんだ。」

「ああ、今日は特別。何か目が覚めちゃって。で、志信は週番だったから朝早いし、一緒に来たの。」

あんな状態じゃ、週番は無理かな？でも、大丈夫だよ。もう一人いるし。

「今村さんこそ、朝早いんだね。」

人のこと言えないよ、そう言ったら今村さんはけらけら笑って、それこそそうだ、と言った。

何となくだけど、今村さんって朝とか苦手そうないメージがあるから、早い時間の登校ってちよつと違和感がある。なんて、失礼なこと、幼馴染の志信ならともかく、あの今村さんには言えないから心のうちにそっとしまっておこう。

1章 始まる 2

何だかんだで話しながら歩いているとあつという間に教室に着いていた。今村さんは廊下側の前の席、私は窓側の比較的後ろの席、ドアで軽く挨拶して各々の席に着いた。

道すがら一つ前の席の子に挨拶し、席に着きかばんを下ろす。机の上に広がる一校時目の古典の教科書やらノートやらが置かれているのを見ると、宿題をしに早く学校に来たんだということがわかった。

「ねねっ、香住。あんたあの今村翔華と一緒にガッコに来たの？」

耳打ちするようにひそひそと彼女はそう尋ねた。事実だし、私はその言葉に頷き授業の準備をし始めた。

「あの大人しい香住がやるねえ。今村の噂、知らないわけじゃないんでしょ。」

大人しいかどうかはわからないけど、今村さんの噂を知らないわけがない。

派手な外見、どんな人でも物怖じしない態度、そしてまあ、平たくいえば口が悪い。しかしながら、成績は学年二位で、運動神経抜群、生徒会長に推薦されるくらいのカリスマ性、そして実家はあの今村。この町で最も力を持っている今村の娘さんだけに表立っては言わないが、実は裏で援助交際してのではないか、どこぞのレディースの頭張ってるのではないか、ヤクザの愛人なのではないかなどなどといったよくない噂が生徒の間で実しやかに流れている。

実際はどうなのか分からないし、あくまで噂のうちなのだろうけ

ど。

「色々あつて、一緒に来たの。」

「ふーん？そいや、清田とは別だったんだね。」

いつも一緒に来るじゃん、彼女はそう付け加えた。

「うん。」

色々聞きたがるのは女の子の性なのか。にしても、後ろを向いて話してちゃ宿題が終わらないんじゃない？まあ、宿題している本人が話し込んでるから良いといえば、良いんだけど。

そんな心配をよそに、彼女は話し続けてる。それにとどき相槌を打って、手に頬について黒板をぼんやり眺めながら鐘が鳴るのを待った。

「はい、みんな席に着いて下さい。」

そう言いながら予鈴と共にやって来たのは、このクラスの担任の青沢先生。うちの学校で、わりと生徒達に人気の高い女の先生だ。その先生の後について来たのは、

「今日は転校生の紹介をします。」

開いた口が塞がらない、とはこのことなのかもしれない。正直、私は驚いた。まさかとは思ったけど、この学年、しかもうちのクラスにだなんて。

「今村……之人君、です。」

そう言いながら先生は黒板にチョークでフルネームを書いていく。チョークの音が小気味良い。

“ユキヒト”って、あんな字なんだ。珍しいと言えば珍しい。苗字は一緒なんだ、やっぱり親戚なんだね。安心した。

（あん、しん……安心？って、どういう意味なんだろう。）

よく分かんないや、変なの。

「今村君、簡単にで構わないので、自己紹介お願いします。」

「はい。今村之人です。ここに来る前は他県を転々としてました。よろしくお願いします。」

へえ、之人君の家は転勤族なのかな。他県を転々だなんて、大変だろうなあ。編入試験なんてしょっちゅうだったりして。でもそうだとしたら凄いやね、頭も良いつてことなんだろうし。あくまで推測だから分からないけど。

「今村君は、今村翔華さんの親戚だそうです。」

だから苗字が一緒なんだ、そういう意味のざわめきが広がった。みんな考えることは一緒なんだ。

「えつと席は……そうね、香住さんの隣が空いてるからそこにしましょう。香住さん、悪いんだけど後で空き教室から机と椅子を持ってきてあげてね。」

はい、ショートホームルームお終い。そう言って先生は教室を出てった。その後一斉にみんなが教科書出したり、飲み食いしたり、お話に花を咲かせたりする。何人かの女の子たちが今村君の周りに集

まっっていったが、話もそこそこに彼は切りあげこちらにやってきた。

「空き教室に案内してくれるかな。」

にこつとあの笑顔を見せてくれた。うん、男の子にこついうのは失礼だけど、やっぱり可愛い。

「うん。あ、荷物重いでしょ？とりあえず私の机に置いてなよ。」

彼の荷物を受け取り、ひとまず机に置いておく。その後彼を伴い、空き教室へ案内した。

「もう敬語じゃないんだね。」

道中、開口一番に彼はそう言った。

「……だって、朝会ったときには何年の人か分からなかったし。」

もし自分が三年だったなら、同い年か下級生か、そのどっちかの選択しかないから今みたいに普通に話してた。

「朝、といえば、“あの事”誰にも言っていないんだね。」

之人君は、まるで世間話でもするみたいにそう言うけど、なんだか空気が肌を刺すようにピリピリとしている気がする。見てみると、彼は怒ってもいなければ笑ってもいない、本当に普通の表情をしていた。だから余計に怖い。

「どうしてわかったの？」

「みんなが俺を見る目が畏怖ではなかったから。単純に、転校生に

対する興味くらいしか見当たらなかった。」

ああ、だからわかったんだ。

（もし言つたとしても、誰も信じてくれないよ。）

そう思つたけど、これ以上この話をするのも憚れたので、その言葉は飲み込んでなかったことにした。

お話ししながらだと、空き教室にはあつという間についた。之人君はとくに選ぶことなく、入り口付近にあつた机に椅子を乗つけた。

「それでいいの？選んだり、とか……」

「ぱつと見、みんな同じだし。」

「そうかもしれないけど……ほら、机の脚の長さがちよつとアレで、がたがたしちゃうものとかも稀にあるじゃない。」

消しゴム使うときにガタガタするやつとか、凄く気になる。授業中、先生が説明し終えてみんながノート取つてて静かな時とか、あと試験最中とか、一人だけがたがたしているとちよつと恥ずかしい。

之人君は気にならないタイプなのかと聞くと、彼は君ほど気にはならないよ、と言った。その苦笑気味な返答はいささか気になるけれども、その返事で彼は小さいことは気にしないタイプなんだ、そう思った。かといって、私が神経質な性格というわけじゃない。けれど。

そうこうしているうちに彼は机と椅子のワンセットをひょいっと持ち上げ、すたすた歩いて行く。

「私が頼まれたんだし、私、持つよ？」

後を付いて歩きながら彼にそう提案するも、にこりと笑われ一蹴さ

れてしまった。

「重いし、いいよ。」

「でも……」

「大丈夫。俺が使うやつだから、自分で運ぶよ。それに、女の子に持たせて自分は何も持たないなんて、男としてちょっと、ね。」

そう言うことに気にするんだ。そして、言っちゃうんだ。普通の女の子だったら、こんなかつこいい男の子に言われたらひとたまりもないと思う。もう恋に落ちてるよ、きつと、いや絶対。かつこよくて、紳士的、うん、放っておかないだろうな。

「今日日の男の子はそんなことをごく自然に言えないよ。」

「そう?」

無意識に言っただろう。それって、凄いと思う。レディーファーストの意識が高いのかもしれない。

二人で教室に戻ると、そこには黒板消しを窓辺で叩く後姿があった。黒板消しの掃除は週番の仕事であり、週番のうちの一人は姿が見えない。ということは、

「志信!」

振り向いた仏頂面は、まぎれもなく朝に別れた志信だった。

私が大きな声で志信を呼んだため、主に女の子たちがこちらを振り向いたけど、今はそんなことに気にしていられない。志信の安否を確認する方が大事だ。そういう想いで、之人君に先に席に着いてもらうように言い、志信のもとへと駆け寄った。

「もう大丈夫なの?」

「まあな。怪我の痕だつて、嘘みたいにないし。」

「嘘！それじゃあ、見せ」

「るわけないだろ。ここ、教室。」

教室じゃなきゃ良いの？そう聞くと、金取ってもいいならと言われ、その後ご丁寧に見て笑われた。うん。この毒舌な感じ、ちょっと斜に構えた態度、いつもの志信だ。今村さんたちに感謝しないと。

「ほら、早く席に着けよ。そろそろ本鈴が鳴るぞ。」

「うん。それじゃあ。」

志信に軽く手を振り、自分の席へと戻った。

1章 始まる 3

あれから通常通りに授業が進んでいった。ただいつもと違うのは、空席だった左隣に今村之人君という転校生が座っているということ。彼の授業態度は良好で携帯とかをいじる事なく、黒板と手元のノートを視線が行き来している。ちらりと見えた彼の字は、男の子にしてはとても綺麗で、どちらかと言えば達筆な方だった。それを見た後に自分の字を見ると、正直落ち込む。

そして授業終了の本鈴が鳴る。やっとお昼だ。教科書類をしまおうとした時、ふと影がさした。見上げるとそこにはバッグを持った今村さんがいた。

「香住さん、一緒しない？」

彼女がそう言った瞬間、辺りが一斉に沈黙し、その後ひそひそと声を小さくしての話し声が広がった。今までまるで接点がなかった私を誘ってるということは、つまり呼び出しをされてるんじゃない、なんという誤解でもしてるんだろう。

「良いよ。」

私の軽い口調での返答に、さらにあたりの声が多くなった。今村さん、気にならないのかな。

「あ、之人も来て。」

「わかった。」

親戚の之人君も誘ったことで、みんなは安心したらしく、それぞれ

の会話に戻っていった。

「あの、今村さん、志信も良い？」

「もちろん。いつも一緒に食べてたもんね。」

今村さんの許可も得たことだし、明らかにこちらを遠目で見ていた志信の許へ行き、今村さんたちも一緒に昼食を取る事を伝える。ちよつと不服そうな顔をしてるけど、半場強制事項だと悟つたのか、何も言わずにバッグを持った。

「んじゃ、付いて来て。」

そう言つて先頭を颯爽と歩く今村さんに、私達三人は付いて行つた。ただ歩いてるだけなのに、今村さんはモデルさん並に綺麗でかつこいい。きつと、姿勢が良いからなんだろうな。

なんて勝手に今村さんを分析している間にも、彼女はずんずん進んで行き、階段を上つて扉を開ける、その先には青空が広がっていた。

「屋上で？」

「そ。」

今村さんは

中央に腰を下ろすと、早々に弁当箱を取り出した。それにならつて、私達も腰を下ろし、各々昼食の用意を始めた。志信と之人君はコンビニで買ったパンやおにぎり、私と今村さんはお弁当。というか、今村さんはお重だった。高校生の昼食にお重って……。

「今村さんのお母さんって、凄いな。」

「いや、作つてんのはお手伝いさん。いつもはもうちょっと少ないけど、今日は之人が転校してくるから特別。」

お手伝いさんなんて言葉を事も無げに言いながら、割り箸を之人君に渡す。彼は小さく礼を言つと、それを受け取り、お重に手を伸ばした。

「二人も食べて。」

そしてバツグからもう一膳割り箸を取り出し、志信にも渡した。本来なら二人で食べるように作られたお重なのに、私達が食べても良いものなのか。と思いつつも、お重を見てみると明らかに二人では食べ切れなさそうな量なので、在り難く少しつまませてもらった。とはいえ、私はお弁当があるから本当に少しだったけど、いただいた汁巻き卵は料亭で出されるような美味しさだ。

「で、今日のことなんだけど。」

そう切り出した今村さんの雰囲気、口調は何となくいつもより堅く感じた。

「二人とも誰にも言つてないみたいだから、現状維持でお願いしたい。それと、二人ともには我が今村に来てもらう。」

「今村さんちに？」

私と志信は顔を見合わせる。

現状維持は良い。というか、あんなこと人に言えるわけがない。冗談なんかじゃなくて、本気で言つてもどうせ笑われて終わるに決まってる。でも、なぜ今村さんの家に行く必要があるのか。まあ、警察に行つて被害届を出せと言われても困るのだけだ。

「あたし達はアレを妖と呼称するんだけど、その妖っていうのは“餌”になるものしか襲わないの。」

「“エ”って何だ？」

聞きなれない単語だと私は思っていたけど、志信もそうだったようで今村さんに問うた。

「えさ。」

とても淡泊な答えだった。

「妖は力を有する者を好む。だから捕食する。そして、その被捕食者は大抵今村に連なる力を持つものが多い。」

その考えでいくと、さきほど襲われた私達のどちらか、あるいはどちらも力を有する者ということになって、今村家に連なる力を持つ存在、ということになる。朝の一見ではどうなのかわからなかったから、それを確認するって意味で来てもらいたい、んだと思う。多分。でもわかんない。

「今村はそういった者達を集めている。だから、あんたたちにはうちに来てもらう必要がある。」

まあ、そうだろうな。私の読みは外れてはいなかったらしい。

拒否権は、ない。今村さんの言葉にもそう含まれているのはわかっているし、その瞳が何より拒否するという選択肢を与えなくさせている。一人だったら正直嫌だったけど、何より志信がいる。私より遙かにしっかりしている彼と一緒になら大丈夫だ。

「わかった。どのみち、俺達はそう言うしかなかったんだろっしな。」

「

今村さんは何も言わない。沈黙は肯定なり、というやつだろう。話がまとまったところで、楽しい昼食タイムの再開となったのは言うまでもない。

その後、予鈴とともに屋上を後にした。本鈴がなって、授業が始まってもなかなか身が入らない。今村さんちに行つて、何をするのだろう、何をされるのだろう。そう考えていると、とてもじゃないけど授業なんて身に入らなかった。それでも板書だけは何とか頑張る。そうして約一時間の授業を終えた。うん、長く感じた。入れ替わりに担任の青沢先生がやってきた。

「はい、今日もお疲れ様。この後学級委員長の今村さんはちよつと残つて下さい。あーあと、清田君も。では、おしまい。さようなら。」

「

そついうと青沢先生は教室を後にした。

今村さんと、志信は呼び出しを食らつてゐる。待つてた方がいいよね？そつ之人君に言おうとしたら、さつさと帰る準備をしていた。

「先に行つてて、だつて。」

「え……でも……？」

会話する暇なんてなかった。

「何で、そう言いきれなの？」

「さつき翔華がこつち見て言つたんだ。」

私は聞こえなかった。というより、先生が話してたから、大抵の人

は黙ってたんだと思うのだけど。

「まさか、読唇術、みたいなの？」

「そ。みたいな。」

そういう間にも、彼はちゃっかりとバッグを肩にかけていた。こうしてはいられない、ということで私も慌てて準備をする。といっても、さっきの授業の用意をバッグに入れるだけだったから、そう時間は要らなかった。

「じゃあ、行こうか。」

促され、私は一つ頷くと彼の隣を歩いた。

うん、わかっていたけど、正直たびたびの視線が痛い。彼は気付いていないのか、どこ吹く風という様子で世間話をしてる。なんか十人に一人の割合で女の子達がこっちを見てくる。そりゃそうだよね、こんなにかっこいい男の子と私みたいなのが一緒に歩いてるんだから。あ、さっきの子たち、後ろで「彼女持ちとか残念……」って言うてる。ごめん、彼女とかそういう関係じゃないから。

（って、あれ？何で胸が苦しいんだろう。だって、事実だし。）

やっぱり私、変だな。之人君相手だと、なんだか調子狂っちゃう。

「ねえ、香住さん。さっきから心ここに有らず、って感じなんだけど、もしかして緊張してる？」

その言葉にはっとする。彼にも分かるほどに、私は考えこんでいたらしい。

「つごめん。考え事してて。」

「ふーん。あのさ君、ぬけてるって言われない？」

「言われないよ。」

「そう。（気付いてないだけ、か）」

そしてその後、世間話に戻る。好きな教科や苦手な教科、動物では何が好きか、どんな食べ物が好きで逆に嫌いなものは何か。本当に、ごく普通の会話だ。クラスメイトと下校する、ありふれた風景。

「ねえ、之人君って人見知りしないタイプ？」

「何でそう思ったの。」

「だって、会って初日の私と、普通に会話しながら下校してるんだもん。」

そう言うと、彼は小さく笑った。何がおかしかったんだろう、人の沸点ってわからない。

「するかしないかで言えば、まあ、する方かな。」

「ふうん、そうなんだ。」

私はたまたま大丈夫な相手だったってことなんだね。確かに、緊張するような存在でもないしね、うん。

そうこうしているうちに、住宅を抜け、どっかの森の中に入り、森の中には小奇麗な道を歩き始めた。五、六分歩くと突然開け、そこには高い木塀、大きな門、その奥にさらに大きなお屋敷が見えた。

「ここが、今村さんちなんだ……。」

予想外に大きい。というか、規格外だ。この町に、こんな大きな家、

もといお屋敷があるだなんて。

「さてと、じゃあ、行こうか。」

之人君に導かれるままに、私はその門を潜った。

立派な庭園を横目に、スタスタと先を歩く之人君の後を付いていく。古風なお庭で、まさにお屋敷使用ですという感じ。池には橋が架かっていた。もしかしくなくても、鯉とか泳いでたり……？

やがて向こうに、玄關の前に立つ一人の女性の姿見えた。

「ただいま、ユキさん。」

年の頃はおそらく二十代後半で、身に纏う薄緑の着物がよく似合っている。だからなのか、楚々としている印象を強く受けた。名前はユキさんというらしい。

「おかえりなさい、翔華様からお話は伺っています。」

翔華様、と呼んでいた。あの今村家のお嬢様なんだから、当然といえば当然なのかもしれない。

今村家とは、この町のほとんどの土地を所有する言わば地主であり、町長も今村家には頭があがらないほど裏で実験を握っている黒い情報もあつたりする。

本当かどうかは定かではないから、何とも言いがたいのだけれど。

「香住さんですね。初めまして、ユキと申します。」

「初めまして、香住 秋穂です。」

「こんなところで自己紹介も何だし、中に入らない？」

「あら、私としたことが。そうですね、どうぞお入り下さい。」

玄關の扉をがらりと引き、ユキさんはにつこりと促してくる。

私なんかには敷居が高い家だなあ、なんて考えるもさくさくと勝手知つたる何とやらで入っていった之人君の後を慌てて付いていく。

こんなところで一人置いていかれる方がよほど嫌だ。

少し歩くと、だだっ広い和室についた。座布団が用意されているし、みんなでここに集まって話をするのだらう。

之人君は上座に近い座布団に座った。なので私は下座の末席も末席である座布団に腰を下ろした。といっても、座布団は五枚しかない。先ほど自己紹介したユキさんはいつの間にか姿を消していた。こんな大きく、かつ静かな部屋に之人君と二人きりなんて、気まずすぎる。

「あの、之人、君。」

「ねえ。」

「はい？」

「俺のことは、名前で呼んでくれるんだね。」

沈黙を打破するために決死の覚悟で口を開いたにも関わらず、見事なまでに言葉を被せられた。小気味良いくらいに、鋭利なナイフですっぱりと切られたような、そんな気持ちになった。それはさておき。

「どうして？」

「いや、俺がどうしてって聞きたいんだけどな。」

苦笑気味にそう言われた。

「香住さんって今日見ててわかったんだけど、人のことは苗字で呼ぶタイプだよね。」

ああ、清田は名前で呼んでたね、と言う。

だから気になったんだろう。別に深い意味はないし、説明するほどのことでもなのだけど、聞かれたからには答えないといけない。

「だって、今村さんと苗字同じだから、どっちも苗字で呼ぶと紛らわしいかなって。前から今村さんは今村さんって呼んでたし、そうすると名前で呼ぶとしたら後から会った之人君の方だなって。あと、志信は幼馴染で、ずっと昔からそう呼んでるからだよ。」

之人の家は共働きで、お父さんに至っては長期的に帰らない仕事をしている人だった。だからよくうちで預かっていた。小さい頃から言葉通りずっと一緒だった志信。もう兄弟のようなものであり、家族を名前で呼ぶことなど当たり前。

私の説明に納得したのかしてないのかはわからないけど、之人君はそうなんだ、と言ったきり黙ってしまった。

沈黙再び、と思ったのも束の間、廊下を歩く音と人の話す声が聞こえる。がらり、と障子が開けられ、今村さんと志信と、後ろに小柄な女の子がついて入ってきた。

「待たせて悪かったわね。さて、みんな座って頂戴。」

1章 始まる 4

今村さんはすたすたと歩いていき、上座に腰を降ろした。

凜とした表情で上座に座る彼女は、まさしく人の上に立つために生まれてきた存在なのだと思うされる。いや、実際そうなんだろうけど。だって、クラス委員長だし。

私の隣には隣には之人君、前には志信、その隣つまり之人君の前に例の女の子が座る。

皆が座ると、控えめな声で失礼します、と入ってきたユキさんがお茶を出してくれた。

「ありがとうございます。」

そう言うユキさんはにこりと微笑んでくれた。やっぱり綺麗な人なんだな、と思う。

皆にお茶だしが終わると、音も無く部屋を去っていった。

「とりあえず、自己紹介でもしようか。夏南ちゃん。」

「はい。初めまして、一年の篠田夏南です。」

今村さんに促され、夏南ちゃんはよろしくお願いします、と一礼してにこっと笑った。

「篠田は今村の分家筋で、治癒を得意とする一族なの。夏南ちゃんは、その中でも随一の力を持つてるんだよ。」

「そんなことないです、翔華様。」

分家、治癒、一族。ここは不思議な力を持つ人達が集まっているよ
うだ。

「んで次、之人。」

「名前はみんな知ってるよね。俺の能力は体の一部を変化できること、かな。所謂戦闘型で、本家分家に関係なくこういった異能を持つ者は狩人、と呼ばれて今村当主の手足となり戦うんだ。」

異能、と言った時に一瞬之人君の瞳が揺らいだような気がしたけど、瞬きした瞬間にはいつもの吸込まれそうな真っ黒な揺らがない瞳に戻っていた。

気のせい、だったんだろうか。

「当主はあまりこの本家を離れないから、遠方の妖を狩るのが、狩人なんだ。」

彼は学校で自己紹介をした時に、各地を転々としていたと言っていた。それは狩人ゆえで、当主である翔華さんの代わりに遠方の妖を狩る為だったのだということが今になってわかった。

転勤族だからとか、そういう生ぬるい理由なんかじゃなかったのだ。

次は今村さんが自己紹介する番だった。彼女は見ると、ずっと背筋を伸ばして居住まいを正した。

「あたしは今村の現当主、翔華。あたしの使命は、妖を倒すこと。」

とんでも情報に言葉を失う。凄い人だとは思っていたけど、あの今村家の御当主さんだったとは。通りで格が違うわけだ。合点がいく。ちらりと志信を見してみる。案の定、動揺とかそういった感情は見受けられず、いつもの淡々とした表情だった。

「まあ、そんな感じ。で、次は志信。」

「この場にいるみんなが知ってると思うから、パス。」

この空気でしれつと言いのける志信は凄いと思う。

ここでちょっとした疑問。みんなが知っていると云ったけど、それは夏南ちゃんもってことになる。

志信はもてるけれど、お世辞にも女の子との人付き合いは良いとは言えない。その志信が、しかも下級生の女の子と接点があるとは。

「清田と夏南ちゃんって、知り合いなの？」

そんな私の疑問を代弁するように、之人君が二人に尋ねた。

「私も気になってた。」

小さく之人君の言葉に便乗する。

「清田先輩とは、生徒会で一緒なんです。私、これでも一応生徒会書記なんですよ。」

なんと、夏南ちゃんも生徒会に所属していたらしい。なるほど、それで志信と知り合いなのか、納得。

とにもかくにも、これで自己紹介は終わった。

今村の現当主、今村翔華さん。そして狩人であり、今村さんの親戚の今村之人君。この二人は何の因果か私のクラスメイト。そして後輩で一年生の篠田夏南ちゃんは、今村の分家であり治癒を得意とする一族の人間で、その中でも随一の力を持っている。うん、覚えた。

「どこから説明すれば良いのか悩むんだけど、とりあえず大事なと

こだけ説明するよ。」

あんまり難しい話だと理解するのに時間がかかるな、なんて考えていた私など今村さんは知る由もない。一呼吸置いてから、早くもなぐ遅くもなく、聞き手にとっては聞きやすいテンポで話し始めた。

「昼に妖のことについて話したと思うんだけど、アレがいつからいたかはわからない。でも太古からいたとされている。基本的に食料からの栄養摂取はいらなないみたいだけど、血に飢えることがあるみたいで、そういうときは能力者を捕食、血を摂取するみたい。能力の程度に関係無く、能力者である。ことが重要視されてるね。」

淡々と語られる妖について。急に今朝のことを思い出して身震いする。

あの妖は、確かに捕食する側で、自分達は捕食される側だった。現代での人間は基本的に捕食する側であり、あのような捕食される恐怖など普通に生きていれば感じることは無い。

為す術も無く、ただ最後の一瞬を待つしかできない恐怖。

「香住、大丈夫？」

見ると、心配げな表情で之人君がこちらを見ていた。

「うん、平気。」

あれだけ感じてた恐怖が、自分でも驚くくらいに、まるでお湯で溶かしたみたいに、すうっと溶けてなくなっていた。

何で之人君？とは思えども、今朝驚くほどの身体能力を駆使して今村さんと助けてくれたのを思い出し、ああ、だからか、と納得する。あんな力を持っている之人君がそばにいただけで安心できるのかも

しない。

「で、そんな妖を倒すために寄り集まった能力者たちの子々孫々が、今村一族つてわけ。んで、戦いに傷ついた今村の人間を治してくれるのが、夏南ちゃん率いる分家筋の篠田つてとこ。」

「翔華様！率いるだなんて、私は、そんな……。」

「何よ、似たようなもんでしょ。」

恐れ多いとばかりに、必死に否定する夏南ちゃんを今村さんは一蹴した。言いたい事はあるだろうに、不本意ながらも夏南ちゃんは押し黙ってしまった。

「一族の人間は妖の血を一度飲ませられるの。適合し、己の体を変化させることをできた人間は、本家分家に関係なく狩人となり、ゆくゆくは当主と戦う……うん、さっき之人が言ったからいいか。ただ、狩人って本当に珍しい存在で、その代ごとに一人いれば良い方なの。狩人を持たない当主だって過去にいたし。そう考えれば、二人も狩人がいる今つて豊作だけど、異常なんだよね。」

「俺達を数年に一度実る果物かなんかみたいに言っなよ。」

呆れたように之人君はそう言うと、今村さんはごめんごめんと謝った。

二人も、ということとは、之人君みたいな力を持つ人が他にもいるらしい。少し気になるけど、まあ、

そのうち見てみたいぐらいの気持ちだ。

「妖と戦う、なんて言ったけど、能力者を保護するっていう目的もあるわけよ。で、各地にいる能力者を探したりとか、あと妖に関する情報収集とか、その他雑用諸々を受け持つのが、“暗くら”

”つていう一族。その中から当主直属の部下が代々一人輩出されて、“燈織”^{ひおり}という名を襲名するの。”

今村さんが言うには、“燈”^{とも}るに、織る、と書いてヒオリと言うらしい。

珍しい名前だな、なんて思うも、代々と言うからには昔から使われていた名前ということがわかり、そう考えると今の名前の常識なんて当てはまらないのだろうと納得した。

今ここにその燈織さんもない。例の狩人さん同様、そのうち会ってみたい気もする。

「あと、これ大事。さっきの和服の似合うめっちゃくちやきれーな人は篠田ユキさん。夏南ちゃんのお姉さんで、この家の一切を取り仕切ってくれるお手伝いさんなんだけど、何かあったらこの人に聞いて。」

今村さんとユキさんは対極関係にある美しさだ。今村さんが陽とするなら、ユキさんは陰。前者が凄烈ならば、後者は儚い。

それにしても、と思う。

今村さんは、ユキさんに何かあったら相談すると良いと言った。でも、相談するような何かがあるほどこの屋敷に来るだろうか？

「おい、今村。」

「なに、清田。」

妙に漫才のようなやり取りに聞こえるのは私だけ、なのかな。

うん、そうだ。だってみんな普通の顔してるもん。

「話の流れから察するに、俺たちは今日付けでこの今村一族になる

のか？」

はっとして今村さんを見ると、彼女は頬を掻き、うーんと唸り難しそうな顔をしていた。

「いや、はつきりと能力が出たわけではないからねー。とりあえず二人はうちに泊まってもらって、力の覚醒したら一族に入ってもらってことで。」

さらりと言われたが、なかなか聞き捨てならない。

つまり、覚醒するまでこの家のお世話になるということである。修学中の学生が、他所の家に。しかも覚醒がいつになるか解らない上に、しないかもしれない。つまりどれだけここに滞在するかわからないのだ。それなのに親に何て説明すればいい。というか、許されるのだろうか？

それに、覚醒したらしたで、一族の仲間入りは決定事項らしい。

「覚醒したらって、曖昧だな。だいたい、親に何て説明すれば良いんだよ。」

私の疑問を感じ取ってくれたのか、あるいは自分が疑問に思ったかなのか、私がどう言えば良いのかわからずにぐるぐる悩んでいたことを、さらりと今村さんに聞いてくれた。おそらくは、後者の方で。

「そうだねえ……ま、うちで住み込みで勉強するってことにすれば良いんじゃない？それでも納得してくれなかったら、燈織に電話してもらってから大丈夫か。いざとなったら、記憶操作してもらってから……って、そんなに怖い顔しないでよ。」

記憶操作されても、痛くも痒くもないし、後遺症なんてないんだから。

そう今村さんに諭された。自覚がないだけで、そんなに私は怖い顔をしていたのだろうか。

でも冷静になつて考えてみると、一度妖に襲われている以上、また次がないとも限らない。もし家にいて、家族を巻き込んだりしたら？ 私なんかの力じゃ家族を守るところか、返り討ちだ。私は何も出来ない。見ているだけ。今朝襲われた時にはつきりと理解した。身近なにいる大切な人を守るという意味でも、離れて暮らすことが一番に思える。

それに、一人じゃない。志信がいる。そう思うと心強かった。

「そういえば今村さん。どうやって覚醒させるの？」

まるで見当もつかない。志信をちらりと見てみると、彼も分からないらしく肩をすくめて見せた。

「あんたたちにそれぞれマンツーマンで毎朝稽古をつけようかと思ってる。」

ピシャーン、と後ろで雷が鳴ったかのような衝撃を受けた。稽古とは、あの稽古なのだろうか。肉体を鍛錬する、あの稽古のこと。

自慢じゃないけど、私はもの凄く体力が無い。且つ、持久力も無い。運動が嫌いななんてものじゃない、運動そのものに嫌われてるんじゃないかってくらいに出来ない。

それなのに、毎朝。読んで字の如く、毎日の朝に、稽古をしなくちゃいけないなんて。

「毎朝というからには、回数を経て稽古をしないと、覚醒は望めな

いつてことか？」

「あら、さすが頭良いだけあるわね。副会長サマ。」

「ぬかせ。学年一位のクラス委員長めが。」

ちなみに、志信は学年二位である。順位が一桁だなんて羨ましいかぎりです。

それはさておき、今の二人の会話から、覚醒を知るには地道に毎朝稽古をしないといけないことがわかった。なんてことだ。毎朝来るであろう地獄を分かっていながら回避できないなんて。

「何か問題でもあるの？」

「俺はいいさ。」

我が幼馴染様は、勉強ができる。加えて顔も良い。それだけでも十分なのに、スポーツも万能ときた。スポーツ推薦で学費免除で入れる高校が数校あったにも関わらず、私と同じ偏差値も平均並みの宮野森に来たんだから勿体無い奴だ。

「ただ、秋穂はキツイだろうと思って。」

「香住……あー。」

哀れみをいっぱい込めた目でこちらを見る志信に沸々と怒りが湧いてきたのは仕方が無いことだと思う。思うのだけど、今村さんのその微妙な反応もぐさりとくるものがあって、私の心の中はもうごちゃごちゃになっていた。

「香住つて、体育苦手なの？」

純粹に疑問に思ったのか之人君がそう聞いてきた。その質問、今だけは聞きたくなかったなんて、言えるわけもない。

どう答えようか悩み、しどろもどろになっていた私を差し置いて口を開いたのは志信だった。

「苦手、なんてもんじゃない。運動音痴なんだ。その上、ぼーっとしてる奴だから、もう目も当てられないぞ。」

絶句とはまさにこの事。開いた口が塞がらない。

そこまで言うか、普通。怒りでわなわなと小刻みに震える、膝に置かれた私の手を見て慌てて夏南ちゃんがフォローを入れてくれる。

「清田先輩、言い過ぎですよ。それに、得手不得手は誰しもあるものです。」

「秋穂の運動神経の無さを目の当たりにすれば、お前だってそんなことも言えなくなる。」

もはや撃沈。

フォローを入れてくれた夏南ちゃんには悪いけど、もう何も言えない、何も考えられない、何もしたくない。

毒舌の幼馴染を持ってしまった自分をこれほど呪うことはないだろう。

「まあ、体力を使った覚醒度を上げる稽古もあるけど、そんな運動能力を必要としたものにはしないからさ、俺と一緒に頑張ろうよ。」

慰めるかのように、之人君にぼんと肩を叩かれた。優しいな、之人君は。じゃない、それどころじゃなくて、もしかして之人君は朝稽古のお供を志願してくれたのだろうか。私なんかの？ 今日会って間もない私なんかを？ いやいや、何の冗談を。

「翔華、とりあえず香住の当面の朝稽古は俺が引き受けるよ。もし

覚醒したら、その質によって稽古つける奴はまた決めなおした方がいいと思うけど、まあ、それまでは。」

今村さんはどう考えてるんだろう。そう思って彼女をちらりと見てみると、何か思うところがあるのかじつと之人君を見ていた。何か言いたそうに口を開くも、その口から言葉が出ることはなく閉ざされた。

「……翔華様？」

何か言いあぐねている今村さん心配するように夏南ちゃんが問いかけるも、今村さんは何でもない、とひとつ頭を振って答えた。

「俺だつて“こういうこと”をやってみたくなつたんだよ。」

「……あんたがそう言うなら、そうなんだろうね。あんたは、隠し事をしたり煙に巻いたりはするけど、嘘はつかない。」

之人君は、にこにこと笑っていた。彼は肯定もしなければ、否定もしない。ただ、笑っているだけ。

彼がこれ以上何も言う気が無いと悟ったのか、今村さんは一つ溜息を吐いた。

「まあ、いいわ。そういうわけで、香住の指南役は之人が。清田の指南役は……やっぱ奏季か。」

「そういえば、今夜帰ってくる予定でしたっけ。」

「夕飯にはいるだろうから、そんな時にでも説明するか。」

「奏季さん、姉さんの料理好きですもんね。」

トントン拍子、とは行かないまでもわりとスムーズに私の指南役は之人君に決まった。

そして志信の先生も。名前はソウキさんと言っらしく、今は外出しているよう。なんと夕飯の時に顔合わせらしい。それでいいのだろうか。

ちなみに、夏南ちゃんのお姉さん、つまりユキさんの料理が好きというプチ情報を得た。

（うん、本当にプチ情報。）

「さて、そういうわけで、あたしからの説明はおしまい。夕飯まで時間あるし、夏南ちゃん、二人にこの屋敷の案内でもしてあげて。」

「はい、翔華様。ではお二人共、行きましょう。」

夏南ちゃんに促され、席を立った。

一応今村さんにお辞儀をして、部屋を出ようとしたら、之人君がにこにこ笑いながら手を振ってくれたので私も小さく振り替えてみた。

之人君の表情が一瞬固まったけど、先に部屋を出ていた夏南ちゃんと志信を追いかけていったため、私はその表情を見ることはなかった。

1章 始まる 5

その後夏南ちゃんには、今村さんに言われたとおり屋敷を案内してもらった。

ただ、全部を見て回る時間は無かったから、日時生活に使用するところだけを重点的に教えてもらった。自室はもちろんのこと、お手洗いや洗面所とお風呂、稽古場になる道場、他のみんなの部屋や中庭。

「それにしても、さすが今村家。」

そろそろ食堂に向かった方が良いとのこと、夏南ちゃんに案内されながら私と志信は感想を言いあっていた。

「純日本家屋に、この広さ、期待を裏切らないね。」

「沢山の方がいらっしゃいますから、客間が多い分広く感じるんだと思います。」

なるほど。かくいう私と志信も、当面は客間に寝泊まりすることになった。なったのだけれども、広い。こっそり数えてみたら、二十畳あった。しかも床の間もついて、生花が飾つてあるという。ちなみに、ユキさんが生けているう。ユキさんって、お手伝いさんの鑑だと思います。何でもこなせる素敵なお姉さん。夏南ちゃんが羨ましい。

「そういえば、夏南ちゃんも生徒会に入ってるんだね。」

「はい。書記なんで、生徒会長と違ってマイナーどころだし、私の認知度って低いんですけどね。」

その言葉に、つい詰まってしまった。

確かに私は、彼女が生徒会役員だと知らなかったのだ。痛いところをつかれてぐうの音も出ない私を知ってか知らずか、夏南ちゃんは明るい声で、まあいいんですけどねーと言っていた。

「ところで、香住先輩。清田先輩とはどんな関係なんですか？今日、一緒に登校してたって聞きましたけど。」

この質問、久しぶりに聞いたから懐かしい。

入学したての頃は、私たちの関係を知らない同じクラスを始め他のクラスの女の子がよく聞きにきた。

もてもての幼馴染をもつ宿命のようなのだと理解してたから、ちゃんと答えてたけども。

そういうわけで、私たちは幼馴染で、家も近いから一緒に登校するということをご理解いただけたわけだから、こういった質問をする人は最近ではいなくなっていた。

（新入生の子は、上級生に聞きにくいだろうし。）

下級生、つまり今年入学してきた一年生の中でもやっぱり志信の人氣は健在のようで、志信とすれ違った後にきゃっきゃしてるのを何度か見たことがある。

（つまり夏南ちゃんも志信のこと……？）

先輩、と呼ばれて、夏南ちゃんの方を見ると、何だか困ったような顔をしていた。

「何か勘違いしてるみたいですけど、私、清田先輩のファンとかじ

やないですから。ええ、まったく、これっぽっちも。」

「おい、篠田。本人を前にしてそこまで言うか、普通。」

「あら、先輩いたんですね！ 気付きませんでしたー。」

「お前な……。」

飄々と言つてのける夏南ちゃんに、脱力。今の志信はそんな感じだった。

女の子に対して、そういった態度を取るのは志信にしては珍しくて、正直驚いた。

「でも二人、仲良いよね。志信が女の子にそんな碎けた態度とるの珍しい。」

「明らか、恋愛感情が無いからじゃないですかね？」

つまり、夏南ちゃんから、志信にベクトルがまるで向いていないという。

これはこれで男としてどうなのよ、と通常は思う。しかしそれが通用しないのが志信で、寄せられた女の子には冷たく接し、基本的に女の子には興味無いようなそぶりをする。

そんな志信にとって、同じ生徒会役員で、自分を恋愛対象として見ていない夏南ちゃんは仲間意識が芽生えやすく、打ち解けることが出来たのだろう。

「あ、先輩の幼馴染さんに魅力がないっていうわけじゃないんですよ？ ただ、私には別に好きな人がいるってだけで……。」

「そっそっなんだ。」

焦ったようにフォローをいれてくれた夏南ちゃん。でもその手の話題にどう反応したらいいかわからなくて、当たり障りない返事しかできなかった。

殆ど私と夏南ちゃんが話しながらだったけど、どうやら食堂に着いたらしく、夏南ちゃんが襖を開けてくれた。

（うわー。）

一言で言うと、長い。

おそらく三十から四十人は席に着くことができるであろう長方形の長いテーブルが中央に置かれている。
旅館の宴会会場を思い起こす。

（ここが、食堂？）

食堂というと、何となく学校や会社の食堂だったり、食堂屋さんのそれを思い浮かべる。というか、思い浮かべてた。大っきいテーブルが何個かあって、パイプ椅子が何脚も用意されている、あの食堂風景を。

ある意味、良い意味で期待を裏切られた。

この屋敷には、やはりこういう食事部屋であるべきだ。

「随分大きなテーブルだけど、まさか今からこんなに人が集まるのか？」

「いいえ。これが標準仕様なんです。この大きさで、数人でしか食べないってことに違和感を感じるようですけど、みんな徐々に慣れてくみたいです。」

それはつまり、慣れるほどにここを利用するくらいこのお屋敷に滞在するということなのか。

ホームシックにならないことを祈ろう。

さすがに襖の所で立ち話をするのも憚られてきたので、その部屋に入った。

「席は好きなところにどうぞ。」

「好きなところって……。」

「迷いますよね、やつぱり。まあ、みんな、早く来た人から奥の方に詰めて座ってきますよ、だいたい。」

始めからそう言ってくれば良いのに。なんて思いながら、奥の方に詰めて座る。

私の前が、志信、そしてその隣が夏南ちゃんになった。

「早かったんだね。」

そう言って入ってきたのは、之人君だった。なんと彼は学ランではなく私服で、白のVネックに、グレーのジャケット、深い緑のカーゴパンツ。アース系の穏やかな色合いは嫌いじゃない。彼はにこにこ笑いながら、私の隣に腰を下ろした。

「私服だと印象変わるね。」

「え？あ、ああ。そうかな。ていうか、会話のキャッチボール出来てないよな。」

「そうかな。」

香住らしいな、と笑いながら言われた。

その笑い方は不愉快にさせるものではなく、どちらかと言えば好ましいものだった。

「あー、集まってる、集まってる。」

がらり、と襖を開けて入ってきたのは、之人君と同様に私服姿になった今村さんだった。オフショルダーの赤いミニワンピースに、黒いレースのショートパンツという出で立ちで、本当に今時の女の子といった装いだった。

それなのに、手に持っているのは刀。

一見ちぐはぐな組み合わせだけど、今村さんはなぜかっこよく見える。

今村さん、之人君、二人の私服を見て思い出す。夏南ちゃんだ。

彼女はさっきの顔合わせの後、私達を案内してくれてたから着替える暇がなかった。そのため、今も制服である。

「夏南ちゃん、着替えたかったよね？」

小首を少し傾げる仕草は、普通の女の子がやれば気取って見えるかもしれないが、彼女がやるから可愛らしく見える。

「今村さんたち着替えたみたいだけど、私達を案内してくれてたから着替えられなかったよね。ごめんなさい。」

そう言って謝ると、夏南ちゃんにはこつと笑って、良いんですよ、と言ってくれた。

うん、良い子だ。夏南ちゃんって、良い子だ。

「さて、そろそろご飯にしますか！」

今村さんがそう言っただけで之人君の隣に腰を下ろした直後に、すらりと襖が開けられたかと思うと、そこにはユキさんがいた。
お盆には沢山のお皿が乗っている。

「皆さん、お腹が空きましたでしょう。」

お盆に乗っていたお皿をどんどん並べて行く。それらは彩りや盛り付けの趣向がこらされている上に、栄養バランスも考えられているように見える品々だった。

ユキさんは一度空になったお盆と共に部屋を出たかと思うと、今度は汁椀とご飯茶碗の乗ったお盆を持ってきてそれぞれの前においてくれた。

「おかわりもあるので、遠慮なくおっしゃって下さいね。」

そして、ドアの付近に下がって行った。

「冷めないうちに食べようか。」

今村さんの言葉を合図に、夏南ちゃんや之人君がそれぞれのタイミングで箸をつけていく。

私と志信は顔を見合わせた後、各々いただきます、と言って料理に箸をつけた。

（うわあ！）

驚いた。お料理はどれもこれも予想以上の美味しさで、いつもはこんなに食べないというのについつい食べ過ぎてしまった。

来た初日にこんなに食べる客人、しかも女の子ってどうなんだろうと思い、夏南ちゃんと話しながら食べている今村さんを之人君越しにちらりと見てみると、同じくらいの量を食べていた。これは普通の量なんだと安心して夏南ちゃんを見て絶句した。

（あ、あれ？）

夏南ちゃんの前にあるお皿の料理の減りが異様に早い。もうそろそろなくなりそうだった。

「びつくりしただろ。」

私の考えていることがわかったのか、之人君が苦笑しながら若干ひそめた声で言う。

「あの子、小柄な割によく食べるんだよ。」

にも関わらず、ぼっちゃりさんじゃないなんて羨ましい限りです。

「人一倍頑張り屋だから、修行もハードだし、その分お腹が空くのかもね。」

なるほど。運動量が多い分、食欲旺盛で、摂取したものは体に脂肪としてつかない、そういうことなのか。

根っから文系気質の私には真似出来そうにもない。

「そういえば……」

口を開いたその時に、すぱん、と小気味良い音をたてて襖が開けられ、そこには一人の男の人が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308x/>

螺旋の絆

2011年11月20日07時14分発行